

主要地方道六日市匹見線特殊改良工事に伴う

石仏頭遺跡発掘調査報告書

匹見町教育委員会

平成6年2月28日

主要地方道六日市匹見線特殊改良工事に伴う

石仏頭遺跡発掘調査報告書

匹見町教育委員会

平成6年2月28日

例　　言

1. 本書は平成4年度、「主要地方道六日市匹見線特殊改良工事」に伴って、益田上木建築事務所から調査依頼を受けて、匹見町教育委員会が行った発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根大学法文学部教授	田中義昭
	島根県教育委員会文化課文化財保護主事	熱田貴保
事務局	匹見町教育委員会教育長	斎藤惟人
	匹見町教育委員会次長	渡辺隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	佐々木厚造
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	大賀幸恵、大谷百合子、栗田鞠江、大城法子	
調査参加者	森清、栗田定、森脇雅夫、渡辺照、斎藤直行 中間昭二郎、山崎リマヨ、長谷川時子、溝田久子	

3. 発掘調査に際しては、益田上木事務書匹見出張所の職員、また土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書の作成にあたっては、堅穴住居址をSI、土坑をSK、柱穴をPした略称もって称号している。

5. 紙数に伴って、図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は、渡辺友千代・大賀幸恵・大谷百合子・栗田鞠江・大城法子が各分担し、執筆・編集は調査員渡辺友千代が行った。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	(渡辺友千代)	1
第1節 位 置	1	
第2節 環 境	1	
第2章 調査にあたって	(渡辺友千代)	5
第1節 調査の経緯	5	
第2節 調査の経過と概要	5	
第3節 分布調査地点の調査概要	6	
1. 調査の概要	6	
2. 分布調査地点の立石	6	
第3章 層序と遺構	(渡辺友千代)	11
第1節 層序と層位	11	
1. 基本層序	11	
2. 層 位	12	
第2節 遺 構	12	
1. 遺構の概要	12	
2. 各遺構について	12	
第4章 山 土 遺 物	(渡辺友千代)	20
第1節 遺物の概要	20	
第2節 実測 遺 物	20	
1. 純文土器	20	
2. 石 器	20	
3. 磁器・土師器・須恵器・紡錘車	22	
第5章 小 結	(渡辺友千代)	24

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1)	1
第2図 遺跡位置図(2)	3
第3図 遺跡配置図	7
第4図 土層図	9
第5図 石仏立石図	10
第6図 遺構断面図	11
第7図 遺物出土分布状況図	13
第8図 遺構図	17
第9図 実測図I	21
第10図 実測図II	22
第1表 遺構計測表	15

図版目次

図版1 1. 北東からみた地点近景	2. 北からみた中央トレンチ（分布調査）
図版2 1. 北から見た石仏と称する立石	2. 西からみた石仏と称する立石
図版3 1. 遺構現出状況（SIの北西部）	2. 遺構検出状況（SIの北西部）
図版4 1. 土器出土状況	2. 南西からみたSIの現川状況
図版5 1. 南からみた発掘区全景	2. SK12検出状況
図版6 1. 南西からみた完掘状況	2. 繩文土器と石器
図版7 1. SK14から出土した土師器	2. 土師器・須恵器・紡錘車

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 位 置

本遺跡は島根県の西端、山口・広島の2県に接する中国山地の脊梁部にあって、その町域を日本海に向って貫流する匹見川の左支である紙祖川の右岸に立地する。その所在地は島根県美濃郡匹見町大字紙祖^{いはづ}43番地であつて、石仏頭という遺跡名はその小字名によつたものである。



第1図 遺跡位置図(1)

第2節 環 境

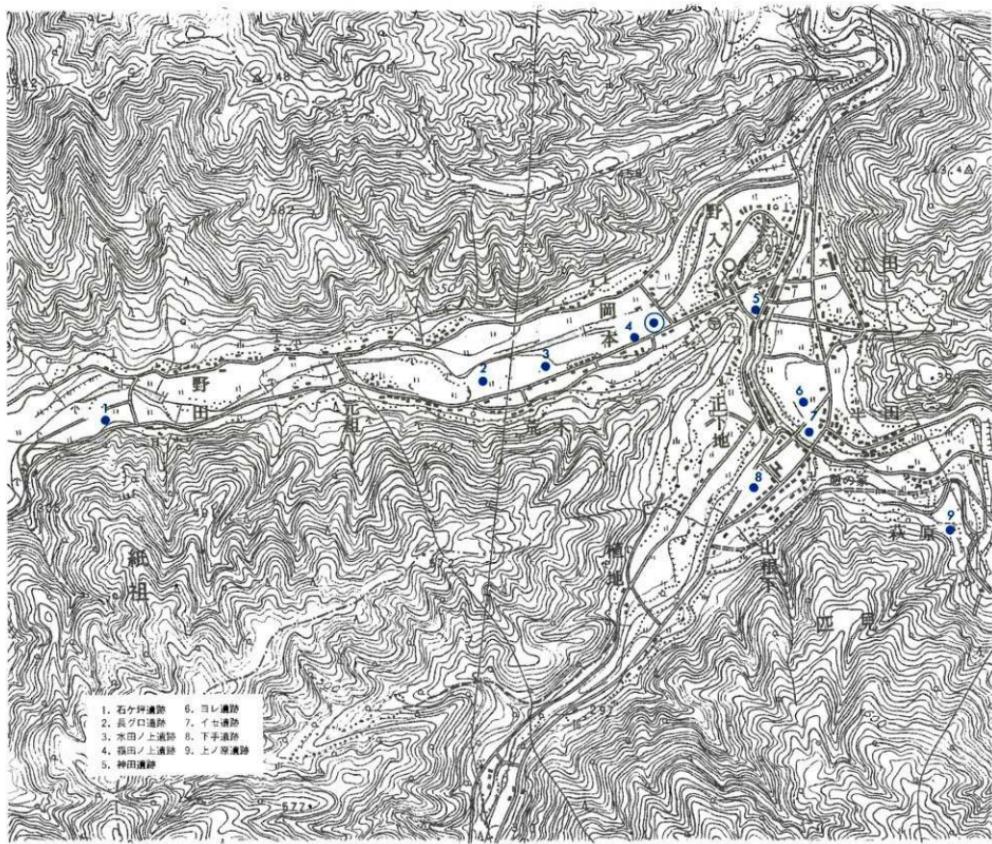
本地域は、北東流する紙祖川が形成した河岸段丘面が狭長ながら拓けており、その段丘上には水田部を中心に、また山裾側には民家が並居している(第2図・図版1-1・遺跡俯瞰)。遺跡は標高約264m測る河岸段丘端に存在し、左流する紙祖川は比高差約6m測って、700m下流で匹見川と相会している。

このように河岸段丘が発達する本地区では、一方で原始古代遺跡も集中しており、30m上流側には縄文時代から弥生時代に至る遺物が出土した水田ノ上遺跡があり、同じく500mには著名な縄文晩期の配石遺構が検出された水田ノ上遺跡群がある。また水田ノ上遺跡の山裾側には古墳時代の下正ノ田遺跡があり、その300m上流には古墳末期から平安時代に至る方形堅穴住居址が検出された長クロ遺跡などが分布している(第2図)。

(渡辺友千代)



遺 跡 備 資



第2図 通路位置図(2)

第2章 調査にあたって

第1節 調査の経緯

本遺跡は、委託業者である益田木工建築事務所の「主要地方道六日市匹見線特殊改良工事」に伴って、発掘調査の依頼を受けた匹見町教育委員会が行ったものである。

その経緯は、平成元年9月21日付で同事務所から工事計画書が提示されるとともに、本地区に係る埋蔵文化財の有無についての打診があったことに発生した。依頼を受けた当委員会は、対象地点の30m南西側の上流域には周知の福田ノ上遺跡が存在している一方、同地点の河岸段丘の発達した立地状況からみても遺跡の可能性がある、旨を同年10月2日付をもって通知した。その後、平成3年4月25日付で同事務所から早急に事前調査を願いたい、との申し入れがあり、同年の9月28日から10月8日のうち9日間を費して試掘調査（分布調査）を行った。

その結果、対象地点の北端側に土師器片等を包含する黒褐色土層が存在することが判った。よって工事期限が切迫しているため、引き継ぎ同年10月12日から11月13日のうちの17日間を費し、文化層が検出された北端面側を中心に 85.44m^2 を設定し、本格調査することにしたのである。

第2節 調査の経過と概要

事前の試掘調査は、まず調査対象地の南東端に任意に基点となる杭を設けることから始めた。そして、その杭から磁北に向って幅1m、長さ20mのトレーナーを設け、さらに紙祖川側の本旨である西面へは幅1mを測るもの、長さ7mのものと8mのものを対列して設けた（第3図）。また石仏頭（いしばとけがしら）という小字名となったと思われる南東面の仏像状に立石する周辺は、2m×2.4m測る範囲をもって東側に拡張した（第3図・図版2）。したがって調査面積は最終的には 46.8m^2 となった。

調査の結果、表土である耕作土（黒灰色土）または部分的に残存する客土はみられるものの、その下層は河床疊としての砂疊層であつて（第4図）、全体的に明確な文化層は確認することができなかつた。しかし北端には、上位面河床疊との間層に黒褐色土層が堆積されていて、当層から数片の土師器が出上したので、つぎの段階として、その当延長域を本格調査することにしたのである。

本格調査は対象地の水田地形に従つて実施したため、変則的な区画を呈し（第3図・第7図・図版4-1），その面積は 85.4m^2 であった。掘削においては大手画のまま平面的な掘削方法で行うと

ともに、遺物の取り上げは個々に平面位置および垂直位置を実測し、層位も確認した。また遺構については半截法で嵌入状況を捉らえることも行うとともに、共伴遺物があった場合、その遺構名を明記して取り上げる、といった方法で行なった。

第3節 分布調査地点の調査概要

1. 調査の概要

本地点の調査は、トレーナー式で46.8m²を調査した（第2節）。その結果、層序においては1層の耕作土（黒灰色土）、2層の客土（灰褐色砂質土）、3層の茶褐色砂土（酸化鉄層）、4層の黄褐色砂礫層の順に堆積する（第4図・図版1-2）。

その1層は水田耕作土で、黒灰色を呈し、粘質的である。層厚は10~17cmを測り、全体的に薄い。遺物としては、若干の近世以降と思われる陶磁器類が出土した。2層は、客土と想定される灰褐色砂質土で、局部的に残存しているにすぎない。また、礫を含んだ砂土である酸化鉄が沈在する3層においても、部分的であり、ばらつきがみられる。本層においても、遺物・遺構とも検出されていない。

4層は、河床礫である黄褐色をした円礫の砂礫層で、70~80cm大的石塊及び石粒が充実する。層状から判断しても遺物・遺構の存在性は薄いが、ただ中央トレーナーの磁北端の局地には、本層の間に暗褐~黒褐色の尖滅状の包含層が確認されている。

この堆積層は、どのように形成されたのか判断に苦しむが、おそらく元来は、河床礫層とする4層の上面に堆積していたものであったと想定される。しかし後世において、紙祖川によるオーバーフロー等によって大部分は流失されたものの、局地的に嵌入状として残存したものではないかと考えられる。また、表土と地山と想定される河床礫との層間が余りにも近く、大部分は消滅していることからみて、強い削平も行われたものと考えられる。こうした状況から、本地点における考古学的調査は無意味と判断して、調査は拡張することなく完了した。

2. 分布調査地点の立石

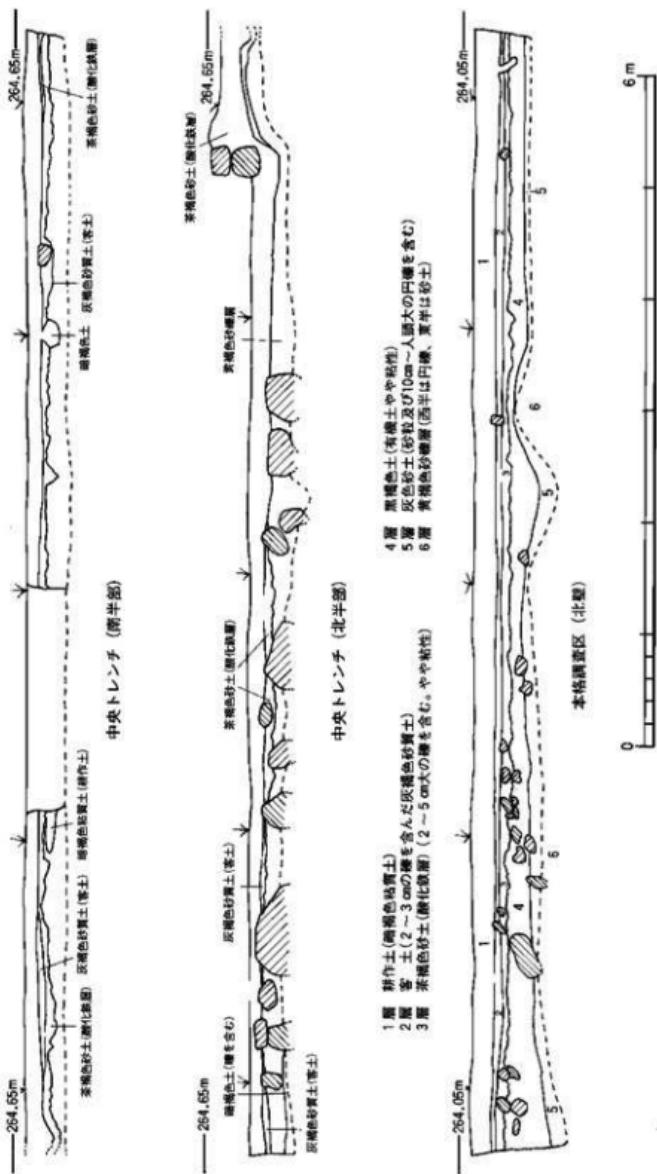
分布調査地点における層序は、1層の耕作土、2層の客土、3層の酸化鉄層、4層の砂礫層の順に堆積する（第4図・図版1-2）。1・2層は後世の人為層というべきものであり、また4層は無遺層であった。したがって、考古学上の文化的意義があるとは認め難いので、分布調査地点は調査を拡張することなく終えた。しかし、地点内には本地名の由来となった石仏状の立石が在りしており、以下この立石についての状況のみを報告しておくことにする。

本報告する石仏状の立石は、円錐形をした花崗岩の河原石が用いられ、その面は北東と南西にあ



第3図 遺跡配置図

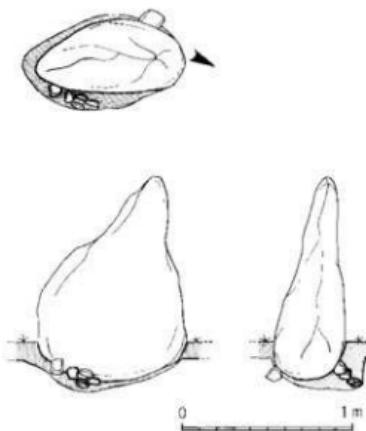
第4図 土層図



る。体高は1.2m、最大体幅は下部にあって、40cmを測る。この石体は立石状にしつらえたらしく、下部の2面側には人為的に数個の石を詰め、補強している（第5図・図版2）。また、その立地側面には耕作土（暗褐色粘質土）が陥入堆積していて、とくに下面側には人為的意図がみられるもの、遺物等は確認されていない。

したがって、そうした結果から本体は、人為的にしつらえられたことは確かであるとともに、その時期は水田開墾以降、もしくは當田時につくられたものであったと想定される。また本体が信仰の対象物であった可能性も立地状況から窺われるが、他に付設的施設や遺物などた検出されているところからみて、地域に深く係ったものではなかったと想像される。むしろ本体の形状から、心情的なものが人為を呼び起こされて据えられたのではなかったかと思われる。そして、その起立する様状から地名稱名へにも転化していったものであろう。

（渡辺友千代）



第5図 石仏立石図

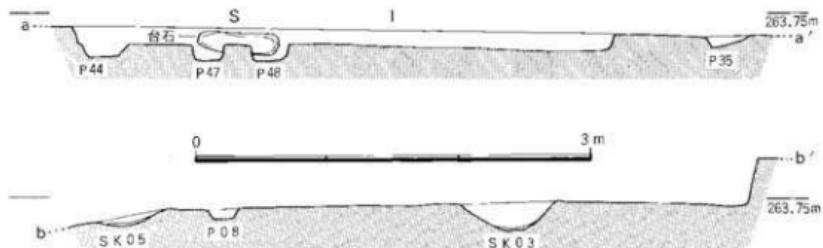
第3章 層序と遺構

第1節 層序と層位

1. 基本層序

試掘調査における、いわゆる南西側を中心としたトレンチ溝においては凡そ1層の耕作土、2層の客土および茶褐色砂土（酸化鉄層）、3層の黄褐色砂礫層の順に堆積する。そのことは北面側における、いわゆる本格調査区の層序と比べて、黒褐色土層と灰色土の2層が欠落しているということになる。これは、おそらく標高の高かった南面側を田地として造成した時に、上面部分に当る黒褐色土層が削平したのではないかと想像すると同時に、紙祖川によるオーバーフロー等によって流失されたものと思われる。とくにトレンチ溝にみられる3層の黄褐色砂礫層では、径50~80cmにおよぶ円礫が充填していることからみて、本層の上面部にもその影響があったものと考えられる（第4図、図版1-2）。なお、2層とした茶褐色砂質土および茶褐色砂土層は、斑あるいは不順に堆積しており、土質的には同一にみられるものの、色調的には分層すべきものかも知れない。そのほか本格調査区の層序からみて、灰褐色砂質土は床上としての客土に当り、茶褐色砂土は酸化鉄の沈在する3層とみるべきであろう。また、その下位に堆積する河床礫とみられる黄褐色砂礫層は、黒褐色土が欠落した南面側のトレンチ溝（分布調査地）においては4層に当るものと考えられる。したがって細分すれば、同地点は耕作土（暗褐色粘質土）、客土（灰褐色砂質土）、茶褐色砂土、黄褐色砂礫層の順に堆積しているものと想定できよう。

また、北面側の本格調査区における層序は、耕作土（暗褐色粘質土）、客土（灰褐色砂質土）、茶褐色砂土、黒褐色土、灰色土、黄褐色砂礫層の順で堆積する（第4図-1・7層図）。



第6図 遺構断面図

2. 層位

表面標高約263.95mを測る本格調査区は、トレンチ法式で試掘調査した分布調査区より約60cm低く、しかも北東流する紙祖川の北面側に向って、1・2層以外の自然堆積層は低く陥ち込んでいる。

その1層は、暗褐色土で水田耕作土である。層厚は18~22cmを測り、南面の分布調査区の耕作土に比べて5~10cm厚く、粘質性である。

2層は、2~3cm大の石粒を含んだ砂質性の灰褐色土。層厚は3~8cmを測り、ほぼ水平に堆積する。この客土は水田の床土に当るもので、本層からは若干の陶磁類が出上している。

3層は酸化鉄が沈在した茶褐色砂土である。層厚は5~10cmを測り、やや粘質的であり、部分的に砂礫を含んでいることから紙祖川によるオーバーフローの痕跡と考えられる。

4層は有機土と考えられ、やや粘性の黒褐色土である。層厚は10~40cmを測り、全体的に紙祖川面に陥ち込んだ西側が深く、また北一南においては下流側の北方向が若干厚くなっている。本層には10cm~人頭大の円礫を含んでおり、遺物・遺構の検出からみて、これらに伴うものも存在しているものと思われる。

5層は灰色砂土で、10cm~人頭大の円礫を多く含む。層厚は5~17cmを測り、全体的に北面側の紙祖川面が厚い。色調的にみると、砂上層に上位層の黒褐色土が浸透したものと考えられ、実質的には6層の上位面であろう。本層からは斜傾に陥ち込んだ西面、特にその南半を中心に縄文土器片及び、その時期に伴うと想定される遺構が僅かに残っている(第8図・第1表・図版6-2)。

6層は、円礫を中心とした砂礫が覆い、実質的な河床礫層である。

第2節 遺構

1. 遺構の概要

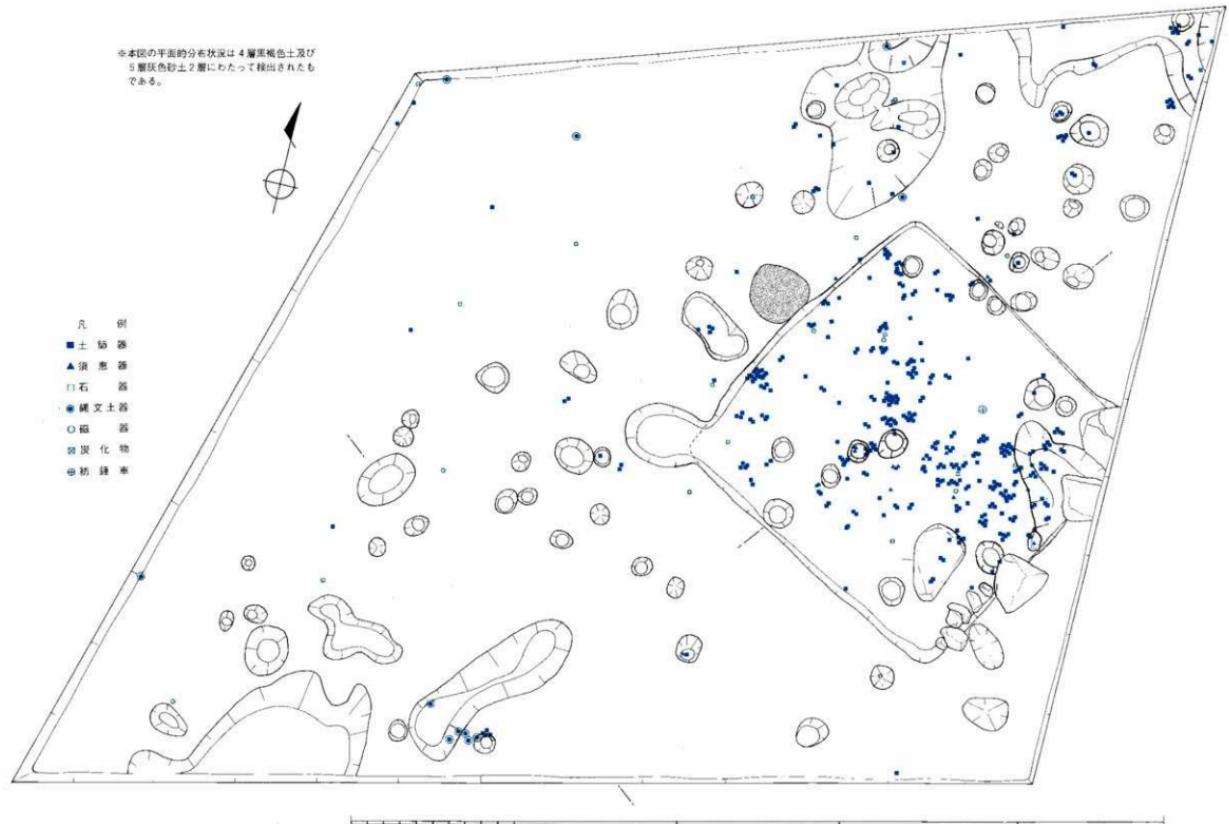
検出できた遺構は、柱穴(P) 55・土坑(SK) 17・堅穴住居址(SI) 1の計73基であった。坑形状から3種目に分類しているが、機能上その語句が的確な表現であるかには疑問がかかる。また掘立柱建物等も存在した可能性があるが、形態的に掘むことができなかつたものは省いているとともに、検出した個々の遺構の時期についても把握しきれていない。しかし中には壁上の陥入状況、あるいは共伴遺物の出土等によって決定付けられるものも存在している(第1表)。

以下このことを踏えた上で、遺構の概略について種目ごとに記述することにする。

2. 各遺構について

柱穴(P) 柱穴として捉られているものは55穴あって、径10~40cm、深さ2~30cmを測るが、凡そ径20~30cmのものが多かった。これらの柱穴の検出にあたっては、4層黒褐色土の單一層内で

本図の平面的分布状況は4層黒褐色土及び
5層灰褐色砂土2層にわたって検出されたも
である。



第1表 遺構計測表

遺構	長	幅	厚	底深	古高	積	更	遺構	長	幅	厚	底深	古高	検出標高	摘要	
P01	46	cm	26	cm	26	cm	263.72	m	P37	38	cm	38	cm	19	cm	263.40 m 上06層共伴
P02	22		16		9		263.71		P38	38		30		5		263.60
P03	22		16		10		263.71		P39	30		34		30		263.58
P04	28		22		22		263.72		P40	34		21		15		263.56
P05	26		24		22		263.72		P41	44		42		12		263.56
P06	18		18		5		263.64		P42	36		22		16		263.61
P07	22		20		3		263.70		P43	30		20		10		263.47
P08	30		22		8		263.70		P44	38		36		8		263.53
P09	30		22		14		263.67		P45	34		32		2		263.43
P10	26		22		5		263.71		P46	30		36		4		263.53
P11	24		22		7		263.71		P47	38		22		12		263.52
P12	24		20		24		263.68		P48	28		28		13		263.53
P13	38		32		17		263.66		P49	38		22		12		263.53
P14	30		30		12		263.65		P50	42		36		9		263.49
P15	24		24		8		263.58		P51	26		21		3		263.47
P16	22		30		19		263.58		P52	38		36		17		263.43
P17	26		26		6		263.67		P53	24		22		8		263.43
P18	28		22		10		263.67		P54	38		24		8		263.47
P19	24		20		11		263.67		P55	28		34		10		263.47
P20	26		22		11		263.67		SK01	—		—		29		263.72
P21	26		22		5		263.67		SK02	56		54		7		263.71
P22	24		28		4		262.57		SK03	28		74		26		263.72
P23	36		30		13		263.55		SK04	130		60		15		263.71
P24	28		28		6		263.55		SK05	78		52		6		263.62
P25	24		24		22		263.45		SK06	54		36		19		263.65
P26	28		28		6		263.45		SK07	62		32		13		263.65
P27	32		26		4		263.59		SK08	52		40		11		263.67
P28	26		20		12		263.62		SK09	38		36		12		263.65
P29	24		20		17		263.62		SK10	54		30		7		263.58
P30	22		18		11		263.56		SK11	48		38		2		263.55
P31	12		8		18		263.56		SK12	100		50		12		263.61
P32	32		26		16		263.40		SK13	—		18		50		263.59
P33	20		20		6		263.57		SK14	—		—		26		263.61
P34	24		24		12		263.57		SK15	—		—		12		263.57
P35	36		32		8		263.59		SK16	100		76		12		263.67
P36	21		14		6		263.59		SK17	—		—		42		263.65

の陥入であったため、新山の文化層が判然としない。と、いうのも本層には少なくとも2期の文化が重複していることが想定できるからである。それは、13世紀後半に位罫付けられるところの磁器が数点出土していること、そして古墳中期後半ごろに比定される土師器等の検出からいえることである。しかしP12・P21・P30・P3・P37・P40・P41の7穴には、土師器の共出性からみて、その人半は後者に伴う時期の柱穴と想像されるのである。ただし1穴であるが、P05のように共伴する縄文土器もみられることから、そこには僅少であるものの縄文期の柱穴も介在していることが想像される。これらの遺構は別称する土坑（SK）において、灰色砂土の陥入とともに縄文土器の共伴事例（第6図）から、その文化包含（構築）層は5層であったと捉えられるが、堆積状況の精査性に欠ける柱穴の調査では確認することができなかった。

したがって立証性に乏しいものも存在しているが、4,5層における出土遺物等みて、これらの柱穴は比半こそ違うものの、3時期のものが介在検出しているものと考えられる。つまり4層中には磁器年代のものと、須恵器・土師器時代のものが包含し、5層は中津式土器に伴う縄文後期の文化層と捉えられるのである。

土坑（SK） 土坑としたものは17基検出された（第8図・第1表）。それらのうちSK03・SK05・SK13の3基は縄文後期、SK12・SK14・SK15は古墳中期のものと、埋土・共伴遺物等の関係から確認できる。

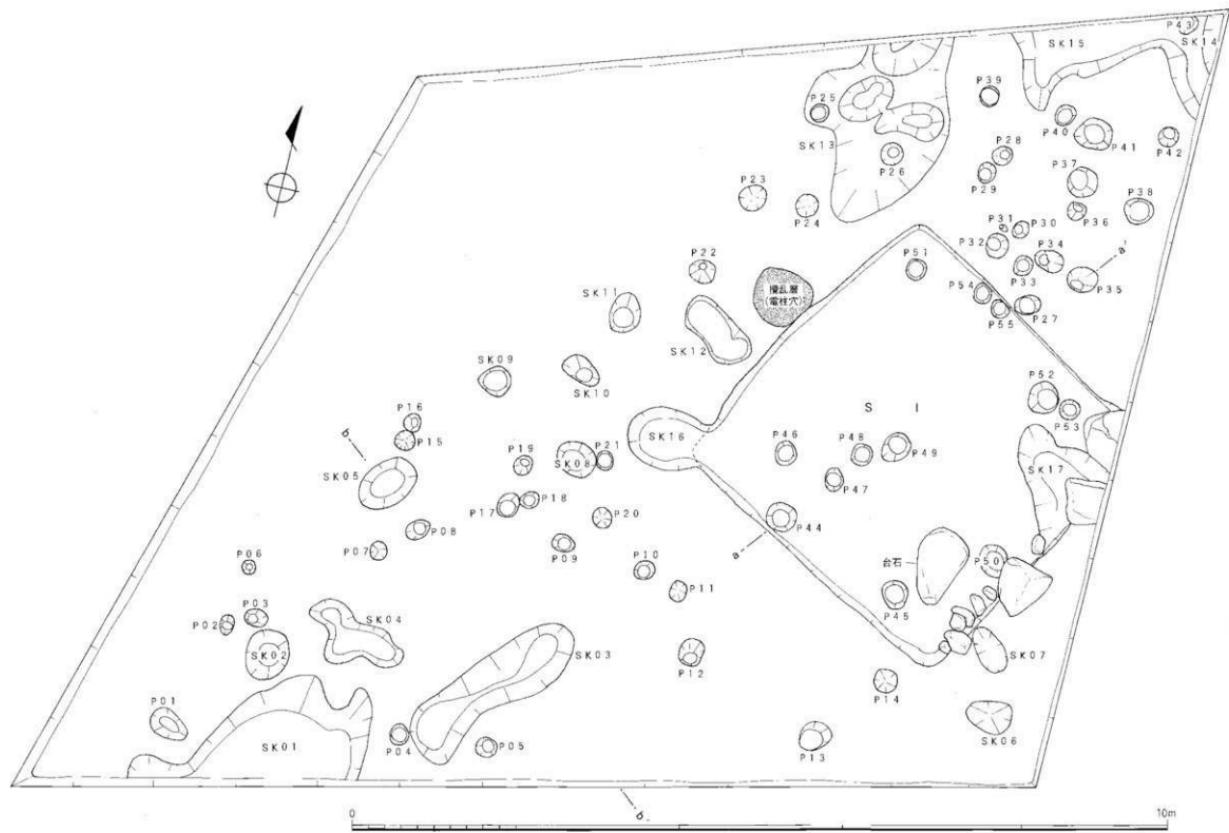
そのうちSK03は落花生形を呈し、検出面は灰色砂土。下部は河床疊である6層に陥入し、坑底部には灰色砂土が堆積し、そこに1点の縄文が出土している（第6図）。またSK13は、長径約2.7mを測る大型の不整形もの。坑底部には縄文土器片・石斧・石器剝片が出上り、3ヶ所の掘削部がみられた。本坑に陥入するP25・P26は、埋土が黒褐色土であること、坑上面に土師器片が出上っていることからみて古墳中期のものと想定できよう。なお、SK05も検出面が5層の灰色砂土であることから縄文期のものと認識される。

方形堅穴住居（SI） の南西隅に連結するSK16は、いずれも黒褐色土が陥入していたが、ただSK16には坑上に僅少の黄褐色砂質土がブロック状に嵌入していたことから、当坑は後世のものと判断されるとともに、SIとは隔離するものといえる。また、前述したSK12・SK14・SK15は、土師器片の共伴から方形堅穴住居期に伴うものと想定される。このうちSK14では、半完形品の土師器（第4図・図版7-1）が出上った。おそらく同時期の生活域は、遺物・遺構の検出分布状況から北東側に向って延びているものと考えられる。

方形堅穴住居（SI） 調査区の東面側に検出されたSIは、北東-南西、北西-南東方向に配置され、短径約4m、長径約4.2mを測り、ほぼ正方形である。隅は丸く、隅丸方形の堅穴住居。残存壁高は12~22mを測り、壁溝は確認することができなかった。検出面は約263.6mで、坑内には埋土の黒褐色土が充填し、その輪郭は明瞭であった（図版4-2）。また、特に住居坑の東面側には10~60cmの右塊が充塞していることから、一時的な紙祖川によるオーバーフローがあったことを物語っている（第8図・図版4-2）。これは上層の3層茶褐色砂土の堆積時期のものと確認され、当住居期以降のものであったと層位的にも想定できる。

本住居に伴う柱穴は、間隔的にみてP45・P46・P51・P53の4柱形式であったと想像する。ただしP49は間隔的に中央に位置していることから、機能上伴っていたものかも知れない（第8図）。なお、これらの柱穴及び他の柱穴も同様であるが、礎板は確認されていない。

他の付設的施設等についてであるが、住居坑の南東面に検出された平坦状の石体は、台石として使用された可能性があるものと考えられる（第6図）。その台石の長径は95cm、短径60cm、厚さ19cmを測って盤状。天端面には使用したと思われるCの字状の痕跡が処どころみられ、ほぼ平坦に据られていた。他の流行と想定される石体群と比べて標高は低く、しかも天端面に使用痕がみられることから台石とみて間違いないであろう。なお、出入口について確認することができなかつたが、北東側辺に検出された8穴の柱穴（P27・P30・P32・P33・P34・P35・P54・P55）地点がその場



第8図 構構図

所に当るものかも知れない。しかし川入口としての柱穴以外、検出面における機能的な堆積痕等についても把握することができず、またカマド址においても検出できなかった。

(渡辺友千代)

第4章 出土遺物

第1節 遺物の概要

本遺跡における総出土点数は、約600点であった。そのうち後世の人為層と思われる1・2層、紙祖川によるオーバーフローによって堆積したと想定される3層までのものは実測をしていない。それらは約100箇点あり、実質的な包含層とされる4・5層に出上した482点については平面及び垂直分布をも実測してとり上げた。

これらの4・5層における実測した遺物の内訳は、土師器426点（88.4%）、須恵器片19点（3.9%）、石器・石器剥片18点（3.7%）、縄文土器片9点（1.9%）、磁器類7点（1.5%）、炭化物2点（0.4%）、紡錘車1点（0.2%）であった。

第2節 実測遺物

1. 縄文土器（第9図・図版6-2）

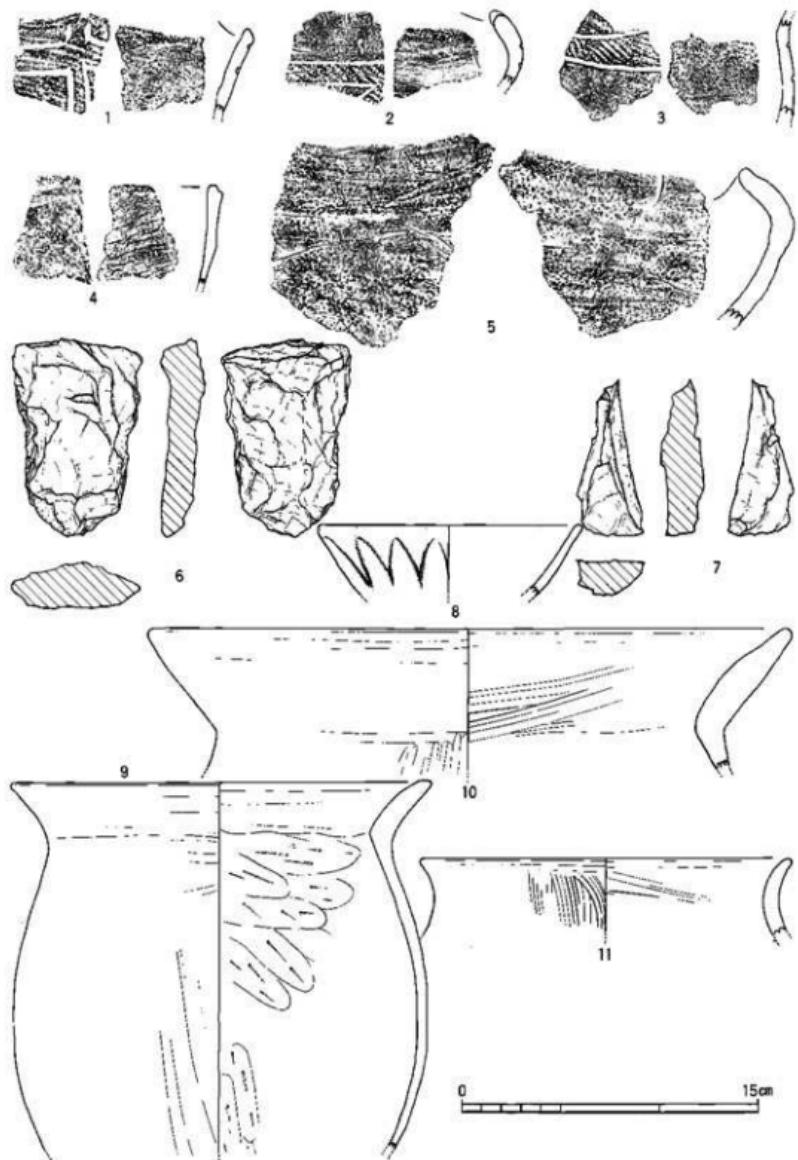
1～5は、4層黒褐色土の基底面及び5層灰色砂土にかけて、とくに南西側を中心に出上した縄文土器で、いわゆる中津式土器類である。

そのうち1は、内外面とも条痕地にナデを施し、外面にヘラ状具による比較的深い2本沈線で窓枠状に施した粗製の口縁部。色調は淡橙色を呈し、内面に煤が付着する。2は精製の丸鉢の口縁部。内外面とも精緻に磨き、外面には2本沈線による幾何学的な文様を施し、その区画内を縄文で埋める。色調は褐色を呈し、焼成は堅硬である。3は、外面をナデ調整の後、2本沈線による曲線文を施し、その区画内を縄文で埋めた粗製土器。色調は褐色を呈し、外面に煤が付着する。4は内外面を条痕地で調整した後、ナデを施す粗製糸の深鉢。口縁部は外向し、その端部を肥厚させ、器壁は比較的薄い。5は、4層黒褐色土から出上した粗製の波状口縁部。頸部から外向して立ち上がるが、口縁部は丸みをもって内湾するという器形のもの。器壁は厚く、器面は条痕状の調整である。色調は淡橙褐色を呈し、内面はナデ調整。

2. 石 器（第9図・図版6-2）

1・2は中津式土器群に伴うと想定される石器。

そのうち1は、4層黒褐色土に出土した土掘具。材質は凝灰岩で、灰色に風化する。基部は折損したものと思われ、残存基長約10cmを測る。周縁部を2次加工で剝離成形し、器形はやや反る。2

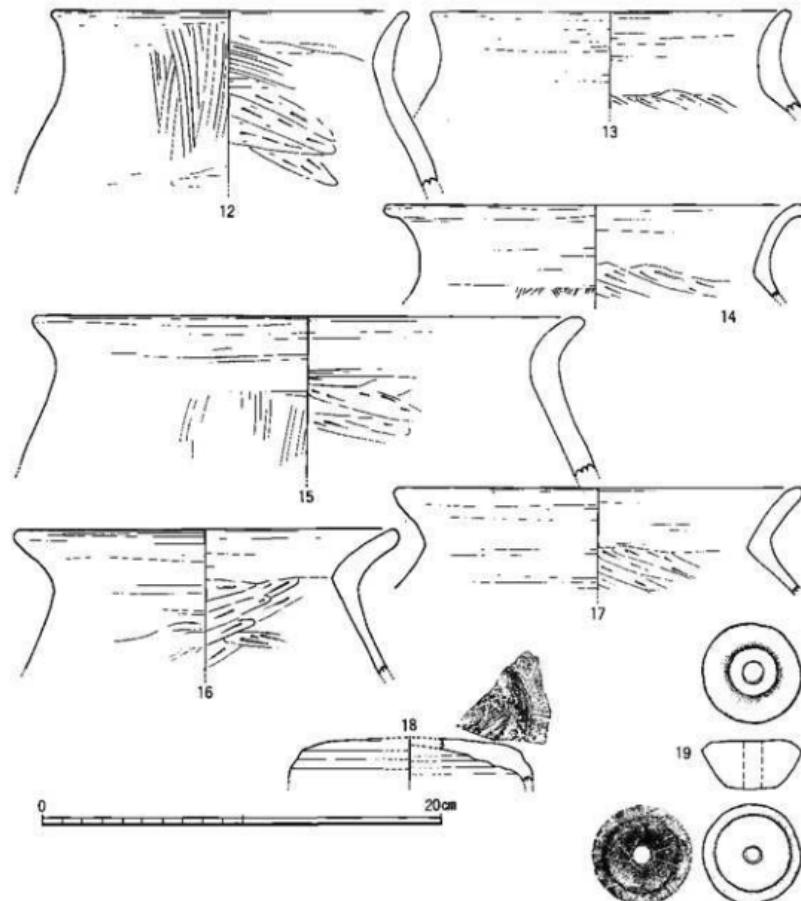


第9図 実測図 I

は、玄武岩質を縦削ぎした石器剝片。2面（上面・側面）に自然面が残り、他面は縦削ぎ状に剝離している。2次加工などの調整はみられない。

3. 磁器・土師器・須恵器・紡錘車（第9図・第10図・図版7）

磁器 8は、4層黒褐色土に出土した龍泉系青磁の椀。淡緑色を呈し、外面体部に蓮弁の文様を



第10図 実測図 II

有する。釉は厚く、口縁部は丸みをおび、やや体部より厚い。おそらく、『九州歴史資料館研究論集
4.1』いうI類-4 bに当るものであろう。

土師器 9~17は口縁器。そのうち9は、SK14の坑底部から出土した半完成の蓋。口縁部は厚みをもって長めに外反し、体部の器壁は比較的薄い。口縁部の内外面はナデ調整とし、外面体部にハケメが部分的に残る。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好。10は、住居内に出土した口縁部。内外面ともケズリ調整の後、ナデを施す。外面頸部下半にミガキのような調整がみられるが、ケズリ痕かも知れない。口縁部は直線的に外傾して長めであり、器肉は内面に向ってふくらむ。胎土に2~3mmの人の石英を含み、色調は淡赤橙色を呈する。11・12は、口縁端部が短く丸く外反するもの。頸部下部の外面をハケメ調整とし、口縁部内外面はナデである。色調は橙褐色を呈し、外面には煤が付着する。これらは形態的にみて、時期を異にする後出のものであろう。14は、頸部から角ばって外反する口縁部で、その端部は丸くて突き出る。口縁部内外面は丁寧なナデで、頸部下部の外面はハケメ、内面はケズリである。色調は淡橙色を呈する。16・17は、器形、調整、色調とも9に類似するもので、いずれも住居内に出土したものである。18は、住居内に出土した須恵器の蓋。天井部は丸みをおびているが、肩部は厚みをもって段落を有し、口縁部を欠くものの直行ぎみに下がる傾向が窺われる。外面の天井部はケズリで、肩部及び内面は丁寧な静止ナデである。色調は灰色を呈する。器形あるいは調整法からみて、おそらく7世紀前半期のものであろう。

紡錘車 19は、住居内から出土した紡錘車で、材質は滑石製。円錐台形を呈し、器径5.3m、器高2.2cmを測り、中心部に径9~10mmの孔穿がみられる。稜を有した表面とみられる面には、中心部から放射状の線刻が3本対線みられる。

(渡辺友千代)

註

1. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中國陶磁器について
型式分類と編年を中心として」

第5章 小 結

本遺跡では、凡そ3期に分類できると想定される遺物・遺構が検出された。

まず1期と捉えられるものは、縄文後期初めの中井式土器を伴う時期である。本期においては、遺構を伴っているものの、その検出が断片的であって、具体的なものは浮び上がってこなかった。これは紙祖川のオーバーフローによるところの擾乱等も考えられるが、僅少の遺物・遺構の検出からみて、生活の端域であったためではないかと想像される。

また2期とするものは、III土した土師器・須恵器等の形態から、古墳中期後半ごろの時期に落ち付くものであろう。本期では住居址が1基検出されており、また上坑や柱穴も相伴した。そのうち本住居は、隅丸方形堅穴形式あるいは4本主柱形式であったこと、そして非カマドであったことなどが想定され、空白に近い本地域の様相を知る上にも貴重な検出であった、といえるものであろう。

3期は、掘立柱建物期である。本期と想定される柱穴は頻出しているものの、狭小の発掘区であった上に、偏在する状況下では、柱列などの形態等については把握することができなかった。しかし時期的については、これらに共伴する青磁から同遺構は、13世紀後半のものに位置付けられるであろう。また検出された数点の土師器にも本期に伴うと想定されるものが数片散見されている。

(渡辺友千代)



1. 北東からみた地点近景



2. 北からみた中央トレンチ(分布調査)

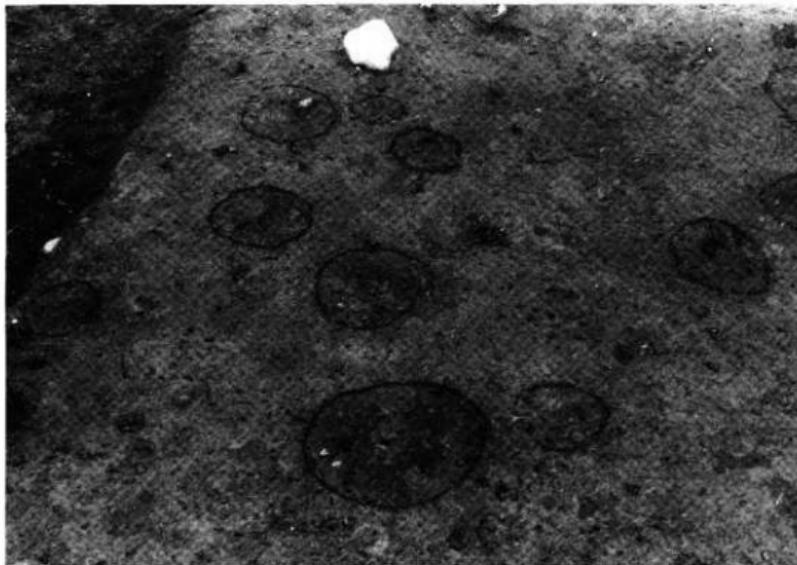
図版 2



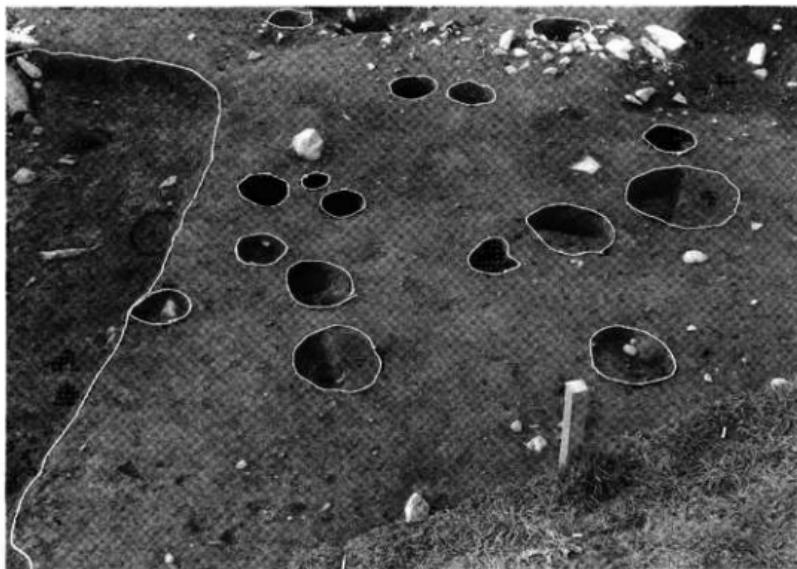
1. 北からみた石仏と称する立石



2. 西からみた石仏と称する立石



1. 遺構現出状況 (SIの北西部)



2. 遺構検出状況 (SIの北西部)



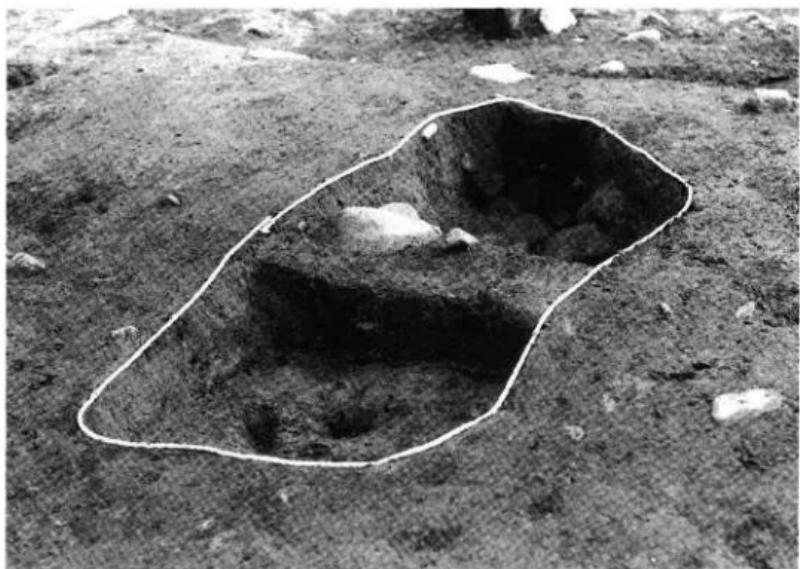
1. 土器出土状況



2. 南西からみたSIの現出状況



1. 南からみた発掘区全景

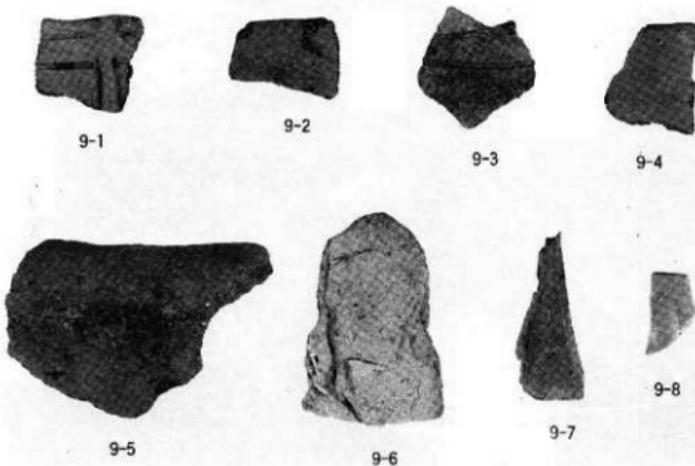


2. SK12検出状況

図版 6



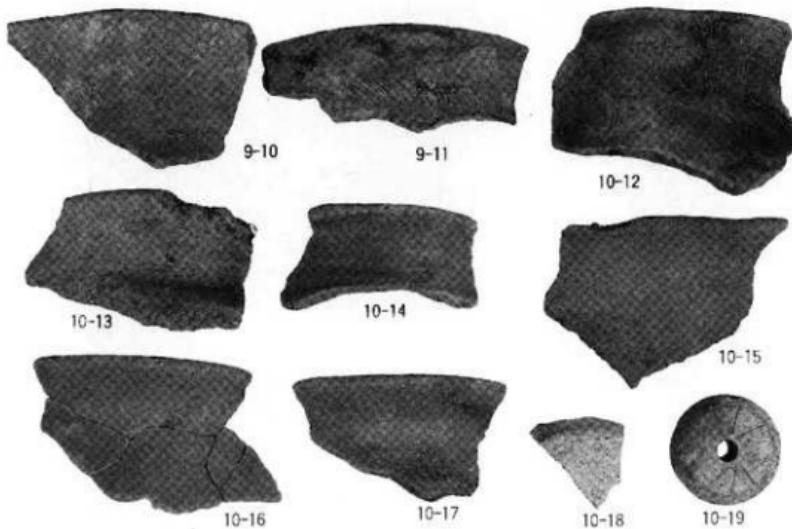
1. 南西からみた完掘状況



2. 繩文土器と石器



1. SK14から出土した土師器



2. 土師器・須恵器・紡錘車

平成6年2月10日 印刷
平成6年2月28日 発行

主要地方道六日市匹見線特殊改良工事に伴う
石仏頭遺跡発掘調査報告書

発行 匹見町教育委員会
鳥取県米子市匹見町4-1260
印刷 有限会社 谷口印刷
鳥取県松江市母衣町89
